論　文 ニダバ (*Nidaba*) 44(2015), 10-19

ケルト語の諸特徴と類型

—アイルランド語における音声的特徴と形態統語的特徴を中心として—

本　城　二　郎

1．序論（ケルト語の概要）

ケルト語は、紀元前の欧州に広く分布し、欧州語の基層言語の一部を構成する。その歴史的変遷の結果、欧州の西辺部に残存する言語グループ（アイルランド語、ブリテン島のスコットランド・ゲール語とウェールズ語とコーンウォール語、フランスのブルトン語（/ブルターニュ語）とスペインのケルト・イベリア語など）として、今尚、印欧語の中の１語派を形成している。その特異な音声的特徴と形態統語的特徴が VSO 言語に固有な類型的特徴と見なされることから、欧州語の古層の反映形と考えられる。本論では、ケルト語の中でも最も古い文献資料を残すアイルランド語に焦点を当て、定アクセント位置/緩音化/鼻音化/口蓋化音など—音声的特徴—と屈折前置詞/進行形：前置詞+動名詞/“be 動詞”所有構文/抱合的挿入代名詞など—形態統語的特徴—を抽出し、諸例の観察を通じて、ケルト語の核心的特徴の理解に迫る。本邦では比較的マイナーな分野とされるケルト言語学への一貢献となれば幸いである。

2．ケルト語の諸特徴とイタロ・ケルト同系説（通説）

現代ケルト語に固有の共有特徴の抽出、さらにその古層（OIr.）とラテン語との近接性を示す事例の列挙（つまりイタロ・ケルト同系説）を以下に試みる。

2．１．ケルト語全体の共有特徴

ケルト語全体に観察される音声的特徴および形態的特徴は、以下の通りである。

2．１．１．子音変異

ケルト語の子音の特徴には、緩音化/鼻音化（音韻的）と二重子音化が確認される。

ｉ．緩音化（Lenition：レニション）

（帯）気音（アスピレート）化とも呼ばれ、より弛緩した子音の発音を指す。（すでに消失したものも含め）先行母音により引き起こされ、語中の母音間において（かつて母音で終わっていた語の後にくる場合には語頭でも）生じる。

p,t,c＞※2ph/f/,th/ϕ/,ch(χ)　　b,d,g＞bh/v/,dh/ð/,gh/ɤ/　　m＞mh/m,v/

s＞sh/h/　　r ＞r/r/　　l＞l/l/　　n＞n/n/　　f＞fh/ϕ/

語頭音の多様な緩音化の例（ModIr. ※1(現代アイルランド語)より)）：

① bád※2/ba:d/（ボート）　　☜※2 Doi(1998), p.16 よりの引用例

rámh an bháid/va:ď/（E. the oar of the boat）（ボートのオール）

na báid/ba:ď/（E. the boats）（ボート(pl.)）

seolta na mbád/ma:d/（E. the sails of the boats）（ボート(pl.)の帆(pl.)）

don bhád/va:d/（E. to the boat）（ボートへ）　☜ don<do(“to”)+an：定冠詞単数

dosna bádaibh/ba:dəv'/（E. to the boats）（ボート(pl.)へ）

☜ dosna<do(“to”)+na：定冠詞複数

a bháda/va:də/（E. oh, boat!）（おお、ボートよ！）

ii．鼻音化（Nasalization）

元々語末が鼻音の語が後続語の語頭要素に与えるプロセスを指す。期待された効果が異なる可能性もあることから、ModIr.ではエクリプス（揺らぎ）とも呼ばれる。

音変化：p,t,c,f>b,d,g,bh/v/　　b,d,g>m,n,ng

文字表記：　bp,dt,gc,bhf　　mb,nd,ng

語頭音の多様な鼻音化の例：　☜ Doi(1998), p.16 よりの引用例

② ModIr. a h-iníon（彼女の娘）　a n-iníon（彼らの娘）

MidIr. Cid dia mboí longes mac nUsnig. ―「デアドレ物語」の冒頭―

（ウスナの息子たちは、何故に放浪したのか）

di+a+m　　mac<macon<macom

何　～のため＋関係辞　was　放浪者　息子たちの

iii．二重子音化（Gemination）

重子音化とも呼ばれ、書記的なプロセスにより引き起こされる子音字重複の現象を指し、（緩音化や鼻音化や口蓋音化のように）音韻的なプロセスとは異なる。主に、緩音化されない子音において生じる。つまり、二重子音化を起こす語は緩音化を引き起こさないことになる。OIr.（古期アイルランド語）では、主に二語が一語として書かれる場合のみ表記された。相対的に、この現象はModIr.では徐々に衰退の傾向にある。下記の２つのケースが緩音化を引き起こさず、二重子音化または鼻音化が発生する音声環境となるが、特に(1)が二重音化に関与的となる。

(1) -s,-l,-r,-n + ll-,rr-,nn-　　(2) -l,-r,-n + t-,d-,s-,l-,r-,n-

２．１．２．その他の特徴

ケルト語内でバリアントを示す特徴としては、以下の４つが挙げられる。

iv．口蓋音化（Palatalization）あるいは軟音化あるいは音交換（i/e/u-Mutation ミュテーション、a/o-Mutation ミュテーション）

後続の音節が高い母音（つまり i,u）か半母音（j）かによって、島嶼ケルト語では、程度の相違はあっても、ほぼ全ての子音において母音の変異が生じ、表記上は、渡り音-i-は義務的であるが、渡り音-u-は不可である。その結果、（特にアイルランド語

では）変異により、細く/口蓋音的な子音 vs. それ以外の広く/中立的な子音という対立が生じる。いわゆる i-Mutation ミュテーションのプロセスに相当する。この現象は、スラブ語の軟音 vs. 硬音の対立に酷似していることから、（ゴイデル語では）軟音化とも呼ばれる。なお、表記上は-i-の挿入で、発音記号上は口蓋子音への軟音符（'）付加で示されることが多い。

Ir.の音節規則：'caol le caol agus leathan le leathan'

（狭い(音)は狭い(音)と共に広い(音)は広い(音)と共に）

③ Ir. bog[bog]（柔らかい）vs. beag[b'og]（小さい）

maoin[mi:n']（富）vs. mín[m'i:n']（滑らか）

labhair![lour']（話せ！）vs. leabhair[l'our']（本/pl./）

＜labhraim[lourim']（私は話す）＜leabhar[l'our]（本/sg./）

bád[ba:d]（ボート）vs. báid[ba:d']＜bád の単数属格・複数・主格

bhíos[v'i:s]（私は～だった）vs. bhís[v'i:ʃ]（あなたは～だった）

＜tá（彼は/彼女は～だ）

v. 語頭定アクセント位置

島嶼ケルト語では、現在に至るまでゴイデル語が（特に Ir.(アイルランド語)で義務的な）元来の語頭第１アクセントを保持し、ブリソニック語は元来末尾第１アクセントにあった形跡もあるが、W.（ウェールズ語）が比較的早く末尾第２音節に移っていた。大陸ケルト語では（資料が少なく部分的ながら）ゴール語が末尾第３音節にあったことが知られている。

vi. "habere"（持つ）動詞の不在と "esse" 動詞＋前置詞句による所有構文

Lat. est mihi（/Gr. está moi）タイプ（=E. there is to me)）が慣用化した構文で汎ケルト語的特徴を示す典型と見なされる。

④ Ir. <u>Is</u> capall <u>agom</u>.（私は、馬を持っている＜私には、馬がある）

cf. R. U meňa lošaď.

Ir. Tá airgead aige.（彼は、お金を持っている＜彼には、お金がある）

W. Mae arian gyda fe.（―同上―）

OIr. ro**s**-mbia lóg.（彼らは、報酬を得るだろう＜彼らには、報酬があるだろう）

☜ -**s**（"to them"）は与格接中代名詞で、OIr.では動詞と接頭語間への挿入が義務的

MidW. Chwioryd a'**m** bu.（私は、姉妹がいた＜私には、姉妹がいた）

☜ -**m**（"to me"）は与格接中代名詞

MidCor. A**m** bes.（私は、持つ＜私には、ある）

MidBr. E**m**-eus.（―同上―）

vii. 動詞文頭位置（VSO 語順）

詳細は第３章を参照。

２．２．島嶼ケルト語固有の共有特徴（特にアイルランド語を中心として）

アイルランド語に代表される島嶼ケルト語には、以下の２つの音声的特徴と９つの形態統語的特徴が観察される。

２．２．１．音声的共有特徴

viii. 語末音脱落（Apocope アポコープ）：

⑤ *wīros>/アポコープ/>OIr. fer（男性）

ix. 語中音脱落（Syncope シンコープ）：音や音節の弱化による語の短縮化

⑥ OIr. samail（同等、同様）<cosmail</シンコープ/<<*cosamail/重複形/

ModIr. obair（仕事）>/属格形-e/⇒※2/シンコープ/>oibre（仕事の） ~~obaire~~

íseal（低い）>/比較級形-e/⇒/シンコープ/>ísle（より低い）

imrim（私は遊ぶ）

>/命令法２人称単数形：語幹/⇒/シンコープ/>imir!（遊べ！）

>/過去３人称単数形：d'-語幹+sé（彼は）/>d'imir sé

（彼は遊んだ）

２．２．２．形態統語的共有特徴

x. 中性形の消失

印欧語から原ケルト語の段階で、すでに中性形は消失し、大半は男性形に合流したと考えられている。

xi. 形容詞の同等級形の存在

⑦ ***-iseto/a**>ModIr. **–ithir**

*senos（古い）→*sen**isetos**（同じように古い）

Ir. léir（勤勉な）→lér**ithir**（同じように勤勉な）

xii. 前置詞＋動名詞による進行形

⑧ Ir. Tá mé ag léamh <u>an leabhur</u>/対格/.

（私は、その本を読んでいる<私は、その本<u>を</u>読書中です）

cf. Ir. Bhí sé <u>ag baint</u> an fhéir/属格/.（**直訳**：Was he at cutting of the grass）

（彼は、草を刈っていた）

S.Gael. Bha e a' gearradh an fheδir.（―同上―）

M. Va eh (ec) giarrey yn fairy.（―同上―）

W. Yr oedd ef yn torri' r gwellt.（―同上―） ☜ Doi(1998), p.290 よりの引用例

ただし、目的語が代名詞の場合、その属格を前置詞と動名詞の間に挿入する。

⑨ Ir. Tá sé ag <u>mo</u> bhualadh (Is he at my striking) ☜ Doi(1998), p.290 よりの引用例

（彼は、私を叩いている）

S.Gael. Tha e 'gam bhualadh.（'gam = at my）（―同上―）

M. T'eh bwoailley mee.（=Is he striking me）（―同上―）

☜ 前置詞なしの動名詞＋代名詞が可能

W. Mae'n fy nharo i. (fy~y=my) (—同上—)

⑩ W. Mae hi'n bwyta afal/対格/.

(彼女は、リンゴを食べている＜彼女は、リンゴを食事中です)

cf. OIr. do rain na mucce/gen./.(その豚に分け与えるため＜その豚の分配のため)

xiii. "esse" 動詞の 2 種：繋辞と存在

is (繋辞) と tá (存在) の区別は Ir.で義務的。 cf. Sp. の ser と estar の区別。

xiv. 屈折前置詞 (/活用前置詞)：前置詞＋人称代名詞

⑪ Ir. liom (私と共に) ＜le (～と共に) +mé (私)

cf. liom の屈折 (/活用)：1sg:liom-2sg:leat-3sg:leis/lei-1pl:linn-2pl:libh-3pl:leo

その他、ModIr. (現代アイルランド語) の主な屈折前置詞とそれらの屈折 (/活用) は、以下の通りである。

agam ("at") ＜ag+mé	agam-agat-aige/aici-againn-agaibh-acu
orm ("on") ＜ar+ mé	orm-ort-air/uirthi-oraim-oraibh-orthu
dom ("to") ＜do+ mé	dom-duit-dó/di-dúinn-daoibh-dóibh
díom ("of/from") ＜de+ mé	díom- díot- de/di- dínn- díbh- díobh
uaim ("from/since" ＜ó+ mé	uaim –uait-uaidh/uaithi-uain-uaibh-uathu

☜ *Teach Yourself Irish* (1980), p.77 よりの引用例

cf. G. zum＜zu dem：前置詞＋人称代名詞

Cz. doň＜do jeho (彼/それまで) oč＜o co (何について)：前置詞＋代名詞

xv. 定冠詞 (＜指示代名詞) の存在

*sindo/a (その/この) ＞**na/an** (ModIr.)

⑫ Ir. an bád (そのボート) an bháid (そのボートの)

na báid (それらのボート/pl./)

an garsún (その少年) an gharsúin (その少年の)

na garsúin (それらの少年たち/pl./)

cf. an t-uisce (その水) an bhean (その女性)

＜uisce の/鼻音化/ ＜bean の口蓋音化

これ以外にも、島嶼ケルト語に顕著な共有特徴としては、

xvi. "be" 動詞＋屈折 (/活用) 前置詞 ag ("at") /gan ("with") による所有表現

vi にも触れた "esse" (ある) 動詞＋屈折前置詞句による所有構文で、その際、xiv の屈折前置詞、特に ag ("at") または gan ("with") が合わせ用いられる。

⑬ Ir. Tá im agam. (=Is butter at me) ☜ Doi(1998), p.290 よりの引用例

(私には、バターがある) cf. =R. U meňa máslo.

M. Ta eem aym. ("at me") (—同上—)

W. Y mae ymenym gennyf i. （“with me”）（－同上―）

xvii. 強調部分（O/S）＋関係詞 a＋動詞による分裂文（/混成文）

⑭ Ir. Is sise a chonaic mé.（あの女が私を見た/私を見たのは、あの女だ）

W. Hi a'm gwelodd.（―同上―）

cf. ＝F. C'est elle qui m'a vue. ☜ イタロ・ケルト同系説（２．３）を参照

W. Mi a'e heirch.（彼女を探しているのは私だ） ☜ w.における ys の省略は義務的

↑/後倚辞's（“be”）の脱落/ ＜'S mi a'e heirch.

↑/後倚辞 ys（“be”）の弱化/ ＜Ys mi a'e heirch.

W. Mi a'e dywedaf yt.（僕が君にそれを話そう） ☜ 上例は Doi(1998), p.291 よりの引用例

cf.＝ F. C'est moi qui te le dirai. ☜ イタロ・ケルト同系説（２．３）を参照

xviii. 無人称 is（“be”）によるくり返し（強調）構文部分（特に Ir.に特徴的）

⑮ Ir. Is ollamh é.（彼は、教授です）

（＝E. It is a professor, him＞He is a professor） ≒F. C'est un profeseur, lui.

Ir. Is é Seán an ollamh.（シャーンは、その教授です）

（＝E. It is him, John, the professor＞John is the professor）

≒F. C'est lui, Jean, le profeseur.

Ir. Cé a chonaic tu?（君は誰を見たのですか）

（＝E. Who (is it) that you saw?） ≒F. Qui est-ce que tu as vu?

２．３．イタロ・ケルト同系説（通説）

ケルト語とラテン語（/印欧祖語）との幾つかの共有特徴から、比較的早い時期に両語派が分派したとする仮説が提出された。通説では、以下の１４個が確認されている。（Hirunuma, T.(1981)参照）

(1) 両言語は、語頭の p-が後続音の-qᵘに同化する。

IE. *※2penqᵘe＞Ital.&Celt. *qᵘenqᵘe＞Lat. quinque/OIr. cóic/OW. pimp（５）

(2) 名詞 ŏ-語幹の属格単数が-ī となる。

IE. *–osio-＞-ī（属格単数語尾）

IE. Lat. virī＜*uiri/Ir. fir（主格 Lat. vir＜*uiros/Ir. fer(男性)）

(3) *–is-mo-/*-ismmo-/*-smmo-による形容詞最上級形の形成。

Lat. maximus（＜*mag-smmo-s） OIr. nessam（次の、最も近い）（＜*ned-smmo-s）

(4) –ā-による動詞接続法の形成。（イタロ・ケルト語のみ残存）

Lat. fer-a-m, ferās, ferat, ferāmus, ferātis, ferant

OIr. bera（＜*bherāt＝Lat. ferat＜ferō（運ぶ）の接続法形）

(5) –s-による動詞接続法の形成。

Lat. faxim（接続法完了形）＜faceō（行く）

OIr. tiasu, tési, téis, tiasmo, tiaste, tiasit（接続法形）（＜tiagu(私は行く)）

(6) –r-による動詞非人称受動態/中動態の形成。

Lat. ītur（誰かが行く）　OIr. tíagar（誰かに行かせろ＜行かれるようにしろ）

Lat. loquuntur＝OIr. labritir（人が言っている/言われている）

cf. 中動態と受動態を区別するのはケルト語のみである。

Ir. midithir（異態動詞＞能動態：彼は判断する）mittir（受動態：彼は判断される）

(7) –to-による動詞的形容詞の形成。アイルランド語は、動詞扱いとなる。

Lat. amātus（愛されて）＝OIr. ro-carad＜car(a)id（彼は愛する）

Lat. captus（捕らわれて）＝OIr –gabad＜gabaid（彼は取る）

(8) –ti 語幹の接尾辞—ō(n)-による拡張。

Lat. mentiō（考え、意見）, - ōnis（属格）

＝Ir. toimtiu（＜*to-métiu）, toimten（属格）

(9) IE. ŕ, Í の取り扱いが同じ。

Lat. arduos（高い）＜*ŕdu̯o-s＜IE. *u̯ŕdhu̯ō-s ＝OIr. ard

(10) *-tt-＞-ss-の変移。

Lat. messus（集めて）（＜metō(集める)）＜*met-to-

OIr. ind-risse（走って）（＜rethid(彼は走る)）＜*-ret-ti̯o-

(11) 前置詞に共通のもの（*de, *kom など）がある。

Lat. dē, OIr. dī/OW. Di　　Lat. cum<com, OIr. co n-

(12) 語彙において両言語に共通のものがある。

Lat. vātēs（預言者、詩人）（＜IE. *u̯at-(吹き込む)）＝OIr. fāith/W. gwawd（**詩人**）

Lat. canō（歌う）（＜IE. *qan-(歌う)）＝OIr. canid/W. canu

(13) 語根*sū-による「息子」を表わす語は、他の印欧語で汎用されているが、イタロ・ケルト語では不在。

Lat. fīlius（息子）/fēl(l)āre（乳を飲む）/fēmina（女）＜IE. *dhē(i)-（乳を飲む）

OIr. macc/OW. map（息子）＜ゴイデル—**Qケルト語**—：*maqqo-〈二重音化〉

/ブリソニック—**Pケルト語**—：*mapo-〈唇音化〉＜Kelt. *maqᵘo-（少年）＜IE. *maghu-（少年、若者）

(14) E. daughter に相当する「娘」の語も、両言語には不在。

Lat. fīlia（娘）＜fīlius（息子）　OIr. ingen（娘）＜IE. *gen-（産む）

3．ケルト語の類型：VSO 言語か V 言語か？

いわゆる Greenberg の語順類型論（正確には言語普遍論）の立場に立つと、（付加語的要素の Ad を除き）文を構成する主要な 3 要素つまり S：主語、O：目的語、V：動詞または P：述語の配列の組合せにより幾つかの現存する設定可能な語順タイプの抽出が可能となる。その中でも、言語の頻度順からは、SOV タイプが最も高く、その次に SVO タイプが続き、VSO タイプは 3 番目に多いと考えられている。それ以外では、VOS

タイプが散見されるものの、OVS タイプと OSV タイプは頻度が低く極めて稀と見なされている。しかしながら、この理論は、あくまでも、S と O が名詞の場合のみに適用され、残念ながら、両者が代名詞の場合は議論されていない。そこで、ケルト語に焦点を当てれば、例えば大陸ケルト語の Gaul.（ゴール語）や Celt.Ib.（ケルト・イベリア語）は SOV タイプで、ModIr.（現代アイルランド語）が VSO タイプとなるが、OIr.（古期アイルランド語）にはいくつかのバリアントが存在するものの、V(/P)タイプが主要で頻度が最も高いことが古文献（例えば *MI.Gl.*）の分析※3から明らかにされている。纏めると、以下の様な歴史的変化が認められる。

Ir.（アイルランド語）における語順タイプの推移：

ModIr. 代名詞 S および代名詞 O の出現つまり（特に人称）代名詞の統語的独立の結果
　　一貫した V-S-O 文法語順

＜MidIr. 多様な語順バリアントの発生による“ゆれ”

＜OIr. 3 種の語順タイプの併存

V/P-S-O タイプ（S が名詞かつ O が名詞の場合：V/P-S-O）☜ Doi(1988)の分類より

：/頻度はきわめて低く稀/

V/P-O タイプ（O が(接中)代名詞の場合：V/P-S）　☜ （接中）代名詞目的語の動詞

（S が動詞人称語尾(ϕ)の場合：V/P-O）　直前位置への義務的挿入

：/稀ではないが低頻度/

V/P タイプ（O が(接中)代名詞かつ S が ϕ つまり動詞人称語尾の場合：V/P）

：/頻度は高く多用/

☜ （接中）代名詞による抱合語的構造をなすことから類型論的には抱合タイプの一種

次に、Kurzová による SAE（標準均一欧州語）に基づく C（中心域）-P（周辺域）類型論※4の（いわゆる地域言語類型論）の立場に立てば、語順以外にも多様な言語現象、文法現象のタイプ分布を設定することが可能となる。具体的には、Ir.（アイルランド語）における特異な文法現象、つまり SAE（標準均一欧州語）の P（周辺域）に属する現象として、以下の 4 つの周辺タイプ（P）が提起されている。

(1) 呼格（Vocative）形の残存：P（⇔C：呼格の消失＜主格への合流）

(2) 総合的未来形（f-未来形）の文法化：P.（⇔C：分析的未来形）

(3) 総合的受動形の汎用（分析的受動形の限定使用）：P（⇔C：分析的受動形）

⑯ Ir. Moltar é.（彼は、賞賛されている＜人は彼を賞賛する）

molaim（私は賞賛する）の/現在・非人称・受動形/

Buaileadh é.（彼は、叩かれた）

buailim（私は叩く）の/過去・非人称・受動形/

Tá an leabhar léite.（その本は、読まれている）

is　定冠詞　本　　léim（私は読む）の現在・非人称・受動形

Tá an leabhar léite ag-am.（私は、その本を読んだ/読み終えた）
by-me

(4) 関係小詞の文法化：P（⇔C：疑問詞起源の関係代名詞）

⑰ Ir. an bhean go bhfuaireas an t-airgead uaithi.
定冠詞　女性　関係小詞　gheibhim（私は貰う）の過去・1人称　定冠詞　お金　from her

（私がお金を貰った女性＜私が(そこから)お金を得た女性）

（注）※1（語派別）言語名の略称は、下記の通りで、以下それに準拠する。

島嶼ケルト語：ゴイデル語：(Mod/Mid) Ir.（現代/中世）アイルランド語/OIr.古期アイルランド語/S.Gael.スコットランド・ゲール語/M.マン島語

ブリソニック語：W.ウェールズ語/Cor.コーンウォール語/Br.ブルトン語（/ブルターニュ語）

大陸ケルト語：Celt.Ib.ケルト・イベリア語/Gaul.ゴール語/L.レーポント語/Gal.ガラティア語

その他の言語：E.英語/F.フランス語/G.ドイツ語/R.ロシア語/Sp.スペイン語/Cz.チェコ語/Lat.ラテン語/Gr.ギリシャ語/IE.印欧（祖）語

※2　下線は比較対照部分を、☜ 記号は注記を、＞は変化を、⇒は変化のプロセスを、*は再構形を、それぞれ示す。以下、同様。

※3　Doi(1988)における分かち書き *Ml.Gl.*（ミラングロース）の詳細な文法的分析。

※4　Kurzová(1997)で提起された類型論。

4．結論

ケルト語（特に島嶼ケルト語）の諸例観察の結果、以下の傾向的特徴が抽出された。

i．音声的特徴としては、緩音化/鼻音化/口蓋化が音韻的特徴をなす。

ii．形態統語的特徴としては、前置詞＋動名詞による進行形、屈折前置詞、前置詞＋人称代名詞/定冠詞の存在、“habere”（持つ）動詞の不在と“esse”動詞＋前置詞句による所有構文（“be”動詞＋屈折前置詞 ag（“at”）/gan（“with”）(Ir.))、強調部分（O/S）＋関係詞 a＋動詞による分裂文、無人称 is（“be”）によるくり返し（強調）構文部分が汎用（さらには文法化）されている。

iii．類型的特徴としては、語順タイプの歴史的変化すなわち V/P タイプ(OIr.)＞/人称代名詞の統語的独立/＞一貫した V-S-O 文法語順(ModIr.)による分析化、さらに C（中心域：SAE 標準均一欧州語）vs.P（周辺域：アイルランド語）対立の観点からは、4つの周辺タイプすなわち呼格（Vocative）形、総合的未来形、総合的受動形、関係小詞の存在が確認される。

なお、イタロ・ケルト同系説（通説）における14個の共有特徴は、古層におけるラテン語との近接性を示唆する。

参考文献：

Bičovský, J.(2005): *Úvod do vývoje Keltských jazyků (An Introduction to the Development of Celtic Languages)*, FF UK:Praha.

Doi, T. (1988) : "The Structure of Old Irish —Syntactical and Typological—," *Studia Celtica Japonica 1* (Eds. by T. Hirunuma et al.), The Celtic Society of Japan.

Doi, T.(1998) :「アイルランド語」「スッコトランド・ゲール語」「島嶼ケルト語」『言語学大辞典セレクション：ヨーロッパの言語』三省堂：東京

Encyklopédia jazykovedy (*Encyclopedia of Linguistic*), Obzor:Bratislava, 1993.

Hirunuma, T.(1981): "The Characteristics of the Keltic Languages," *Studia Celtica Japonica No.16* (Ed. by J. Yoshioka) , The Celtic Society of Japan.

Kurzová, H.(1997): "Morphosyntactic processes in Europe," *Proceedings of LP (Ed.by B. Palek)*, Charles University Press:Prague.

Lehmann, R.P.M. et al (1975): *An Introduction to Old Irish*, MLA:New York.

Russell, P.(1995): *An Introduction to the Celtic Languages*, Longman:London.

Teach Yourself Irish (Eds. by M. Dillon et al.), Hodder and Stoughton:London, 1980.

Yoshioka, J.(1971): "On Celtic Languages (1)", *Studia Celtica Japonica* No1.